

韓国における20代の日本語上級話者の日本イメージ

加賀美 常美代
守 谷 智 美
岩 井 朝 乃

問題の所在と研究目的

韓国人の日本社会、日本人に対するまなざしは肯定的感情と否定的感情が拮抗するアンビバレントな状態であると言われている（鄭，1998）。否定的感情の背景には日韓の過去の歴史があり、日本に対し過去の反省を求めるといった根強い批判も行なわれている。その一方で、日本の漫画・アニメ、ゲーム等日本の大衆文化にも深い関心と造詣があり、日本人以上に日本社会、日本人のことを熟知している。このようなアンビバレントな感情を示すものとして、例えば、岩男・萩原（1982）がソウルの大学生556名を対象に行ったSD法によるイメージ調査では、日本は比較対象である16カ国中最も「嫌い」な国であり、日本人は勤勉で能力が高いが、親しみにくく信頼できないとしている。近年の傾向も同様であり、韓国人学生の抱く日本イメージ調査では複数の結果に「侵略者」などの否定的な側面と「先進国」「大衆文化」などの肯定的な側面が現れている（玄，2005；櫻坂・内藤・泉・奥山，2008）。こうした二律背反的な状態の背景について、櫻坂・奥山（2003）は過去の植民地支配経験や両国の政治的関係のみにより形成されたのではなく、戦後の学校教育による方向づけやマスメディアによる過去の経験強化、日本の大衆文化流入による影響など複合的な要因の作用の結果だと述べている。

これらの日本イメージが発達段階のどの時期にどのように形成されるかを検討するため、加賀美・守谷・岩井・朴・沈（2008；2013）は、2006年、韓国の蔚山で430名（小学3年生105名、中学2年生105名、高校2年生113名、大学3・4年生107名）を対象に、9分割統合絵画法（森谷，1989）⁽¹⁾を用いて調査を実施した。その結果、計3480例の描画が収集され、内容をKJ法⁽²⁾で整理分類したところ、多い順に「生活環境」「大衆文化」「自然環境」「歴史認識・領土問題」等、計14カテゴリーとなった。これらについて研究者間の協議によりイメージ別の分類を行ったところ、中立的イメージが最も多く、次いで否定的イメージで、肯定的イメージは最も少ない結果となった。否定的イメージが小学3年生で20%を占めていたことから、否定的対日観は既に小学生の時期から形成され、中学生からは35%と最も強まり、高校生、大学生では固定化されていく様相が示されたが、中立的イメージは50%、肯定的イメージは20%程度と小学生から大学まで同じ割合で差異が見られなかったとしている。

加賀美・朴・守谷・岩井（2010；2013）は同時期、同対象者に対し、日本イメージに関する質問紙調査を行った。SD法による19対の形容詞項目を評定させ、因子分析を行った結果、「親和性」「集団主義的先進性」「開放性」「強さ」の4因子が抽出された。学年別の一元配置分散分析では中・高校生は「親和性」が最も低く、大学生から否定イメージがやや緩和される傾向が見られた。関心度と知識の変数を加味した

重回帰分析では、日本との積極的接触や日本文化への関心がある人は親和的イメージを抱いている傾向が見られた。また、日本に対する知識が一般的なものであれば、集団主義的・先進的で強い日本イメージが形成され親和性を抱きにくく、逆に日本に対する知識が深まると親和性を抱き、強い日本イメージが緩和される傾向が示された。これらの結果から、韓国の小学生から大学生の日本イメージは、日本統治時代からの歴史的経緯の影響を受け、それを基礎に先進国や大衆文化の現代的イメージが付加され形成されていることが示唆された。

これらの背景の要因について、国史教科書の日本像と韓国人学生の日本イメージ調査を分析した岩井・朴・加賀美・守谷（2008）は、韓国人学生の抱く否定的イメージは歴史教育に現れる「侵略者」イメージに重なると指摘している。また、金（2009）は、祖父母や父母を通じて芽生えた反日意識が、韓国史教育を通じ強化されていくと指摘している。

このように、韓国人の日本イメージには、家庭、歴史教育の影響が強いことが分かる。また、これらの研究では、学生たちの日本イメージは歴史的イメージのみではなく、先進国や大衆文化としての日本イメージもあることも指摘されている。ソウルの大学生1183名を対象とした玄（2005）の日本に関する連想記述調査では、日本イメージ表現の上位に「蔑視的表現」「植民地支配」「経済大国」に続いて「大衆文化」が挙げられている。

しかし、これらの調査では、対象者は日本人との接触経験や日本語学習経験がほとんどないため、日本を熟知し日本語が円滑にできる人々とは様相が異なる可能性もある。こうした日本語学習経験に注目した研究として、櫻坂・内藤・泉・奥山（2008）は、日本語学習者の韓国人大学生222名を対象にSD法により日本と日本人イメージを調査した結果、日本イメージは「先進性」が最も高く、日本語主専攻者と非専攻者では日本イメージの「先進性」と「信頼性」が異なっていることが分かったという。また呉（2008；2010）は2006年に韓国人大学生527名を対象に文章完成法による調査、2009年に同589名に質問紙調査を行い、日本語学習者で特に日本語能力が高く日本人との接触経験がある場合は対人関係に対するイメージを持ちやすく、侵略者イメージを持ちにくい傾向があると明らかにしている。

以上のことから、日本イメージには日本人との接触経験や日本語学習経験が関連すると考えられる。だが、これまでの研究では、描画や質問紙による研究手法の枠組みの中での表出に限られ、日本に対する自由なイメージの表出が制限されている可能性がある。面接法を採用することで、対象者のより深い日本イメージが表出されるのではないかと考えた。そこで、本研究では比較的日本社会や日本人に関心があり、日本語学習経験や生活経験等を通して日本人との接触があると考えられる韓国の日本語上級話者を対象にインタビュー調査を行い、日本イメージ内容の質的分析を行う。研究課題として以下、2点を設定した。

研究課題1：韓国の日本語上級話者の抱く日本イメージはどのようなものか。特に、本対象者に見出される特有な日本イメージはどのようなものか。

研究課題2：先行研究から多くを指摘されている韓国の人々が持つアンビバレントな感情に関連する日本イメージはどのようなものか。

方法

2012年9月下旬に、韓国のソウル市内で面接調査を行った。ソウル市内の大学や日本語教育関係者を通して日本語上級話者を対象に調査協力者を募ったところ、対象者は14名となった（表1）。年齢は22-28歳で、男性4名、女性10名、大学生が10名、社会人が4名であった。滞日経験は経験なしから4年までで

表1 対象者の属性

	年齢	性別	所属・立場	滞日経験	日本語学習歴	日本語レベル	東日本大震災時の滞日経験	20答法回答数
A	23	男	学部4年	なし	7年	上級(N1)	なし	20
B	24	女	学部4年	1年	1年弱	上級(N1)	なし	20
C	26	女	社会人	4年	5年3ヶ月	上級(N1)	なし	20
D	24	女	学部4年	1週間	4年	上級(N1)	なし	20
E	23	女	学部4年	1年	2年	上級(N1)	なし	20
F	28	男	社会人	なし	9年	上級(N1)	なし	15
G	24	男	学部4年	1年	5年	上級(N1)	なし	20
H	26	女	社会人	6か月	5年	上級(N1)	なし	14
I	22	女	学部4年	1年	3年	上級(N1)	あり (在 大阪)	20
J	27	男	学部4年	4年	7年	上級(N1)	なし	20
K	22	女	学部4年	なし	2年	上級	あり (在 横浜)	15
L	21	女	学部4年	1年	1年	上級(N1)	なし	20
M	26	女	社会人	1か月	8年	上級(N1)	なし	20
N	22	女	学部4年	1か月	5年	上級(N1)	なし	20

あるが、全員がこれまでに日本語学習経験や生活経験等を通して何らかの日本人との接触経験を持つ。日本語学習歴は1年弱から9年と幅が見られたが、全員が日本語上級レベルで、14名中13名が日本語能力試験1級(N1)取得者であった。東日本大震災時の滞日経験については、14名中2名が滞日していたと答え、滞在地はそれぞれ横浜・大阪であった。

この対象者に、心理学の手法である20答法(Kuhn & McPartland, 1954)による日本イメージの記入を求めた。具体的には、「私は日本を……と思います。」という文が20個書かれた調査用紙を配布し、各ブランク部分に自身の日本の印象、自分と日本との関係や日本に対する思いを自由に表現するように依頼した。その結果、20個すべて記入した者は14名中11名であり、15個記入した者が2名、14個記入した者が1名であった。その後、各回答に基づき記入の理由や背景を明らかにするため1対1で面接調査を実施した。面接時間は1人1時間から1時間半程度であった。

このようにして得られた計264例のデータを分析対象とし、KJ法による分類を行った。まず、各データにつき、著者3名で協議を行いつつ、グループ化および「表札」までの作業を行った。次に、内容からこれらを肯定・否定・中立のイメージ別に分類した。その後、本調査に関与していない異文化間教育を専門とする研究協力者6名を加えてこれらの妥当性に関する検討を重ね、最終的に肯定・否定・中立のイメージ別に分類した。

結果

研究課題1：日本語上級話者の抱く日本イメージはどのようなものか

(1) 日本イメージのカテゴリー化

分類の結果、表2の通り16の大カテゴリーが生成された。「大衆文化の豊かさ」が全体として最も多く、次いで「日本社会・日本人気質への好意的理解」「歴史・政治」等であった。また、個人的な状況に偏っているものやどのカテゴリーに分類すべきか判断できないものを「不詳」とした。各カテゴリーの定義は表3のとおりである。

(2) 肯定・否定・中立的イメージ別分類

本調査で得られた16のカテゴリーの内容を、肯定・否定・中立的イメージに分類した結果、表4および図1のとおり、肯定的イメージが9カテゴリー142例、否定的イメージが6カテゴリー102例、中立的イメージが1カテゴリー12例となった。肯定的イメージは過半数を占め、否定的イメージが4割程度、中立的イメージ・不詳が1割未満であった。

表2 日本語上級話者の日本イメージ

カテゴリー名	数
大衆文化の豊かさ	29
日本社会・日本人気質への好意的理解	26
歴史・政治	25
地震・放射能	23
人間関係困難	20
経済・産業の発展	17
多様性受容	15
現代社会事情	15
社会的環境整備	13
日本への親近感	13
地理・自然環境	12
世界からの期待・国際的存在感	11
伝統の継承重視	11
食文化の豊かさ	9
日本社会・日本人気質への違和感	9
経済の衰退	8
不詳	8
計	264

表3 カテゴリー定義

カテゴリ名	定義	具体例
1 大衆文化の豊かさ	日本のアニメや漫画、ドラマ、音楽、ファッションなどの大衆文化に関わるもの。	漫画王国、文化コンテンツが豊富、素敵なミュージシャンが多い
2 日本社会・日本人気質への好意的理解	日本人の好ましい行動や態度、日本の社会システムなどの長所を表すもの。	親切な人が多い、礼儀正しい、勤勉さを重要としている
3 歴史・政治	戦争責任の追及、日本の外交関係への批判などを表すもの。	領土問題、韓国や中国と仲良くしななきゃならない、過去の歴史を認めるべき
4 地震・放射能	日本は地震が多く放射能の影響があり危険であるというもの。	放射能の危険がある国、地震が多い、津波で大きな被害を受けた
5 人間関係困難	人間関係における距離の測りにくさによる人間関係構築の困難さを表すもの。	本音と建前があり仲良くなりにくい、いつも周りを気にしている
6 経済・産業の発展	経済、産業面での日本の発展を表すもの。	商社、金融が発達している、トヨタなどの自動車、観光産業の発達、円高
7 多様性受容	個性を尊重し、多様な文化を受け入れようとする風潮を表すもの。	個性を認めてもらえる、いろいろな文化を偏見なく包容している、西洋文化を個性を持って受け入れている
8 現代社会事情	現代の日本社会が抱える問題・事象や現代の日本の否定的な風潮、グローバル化の遅れを表すもの。	高齢化、飛び込み自殺が多い、オタクの多さ、英語に弱い
9 社会的環境整備	街の清潔さや利便性など社会的な環境が整備されていることを表すもの。	街がきれい、電車が発達している、治安がいい、福祉が発達している
10 日本への親近感	日本に対する親近感を示すもの。	もう一度日本に旅行に行きたい、長く住んでみたい
11 地理・自然環境	日本の自然条件や、地形・人口などの地理的特徴に関わるもの。	自然の豊かな国、海洋資源、温泉が多い、暑い、韓国と近い
12 世界からの期待・国際的存在感	世界における日本の存在感の強さを表すもの。	世界的に愛されている国、多数のノーベル賞受賞者がいる
13 伝統の継承重視	文化財や祭り、匠の技など伝統の継承を重視することを表すもの。	古いものを大切にする、祭りが多く、着物や浴衣を普段から着る
14 食文化の豊かさ	日本の食べ物の特徴を表すもの。	食べ物がおいしい、寿司が有名、お菓子がおいしい
15 日本社会・日本人気質への違和感	日本の社会システム、行動規範、生活スタイルや日本人気質への違和感や理解のしなやかさを表すもの。	マニュアルによる束縛、アメリカ偏重
16 経済の衰退	日本経済の弱体化や将来への憂慮を表すもの。	(経済が)危ない、デフレ進行中、どのくらい将来性があるか疑わしい
一 不詳	日本との関連が不明なもの、個別性が強く一般化しにくいと判断されたもの。	いろんな雰囲気を持っている、絵が上手な人が多い

(3) 本対象者から見出された特有なカテゴリー

本調査の結果、調査時点での社会情勢や学習者の心理状態を如実に反映したと見られるカテゴリーが複数抽出された。それらは先行研究には見られない本研究に特有なものであるため、以下に詳述する。

肯定的イメージのカテゴリーの中で、まず「多様性受容」は、個性を尊重し、多様な文化を受容する日本の風潮を肯定的に捉えたものであり、その内容は「いろいろな文化をわりに偏見なく包容している」「それぞれの個性を認めてもらえる」「一人で何でもできる、個人主義的な傾向が韓国より強いと思う」等であった。また「世界からの期待・国際的存在感」は、日本の国際的な存在感や魅力を表すものであり、「世界的に愛されている国」「多数のノーベル賞の受賞者がいる」等であった。これは、対象者個人の見方を超え、より客観的に日本の肯定的側面を捉えたものである。さらに、「伝統の継承重視」は、文化財や祭り、匠の技など伝統の継承を重視することを表すもので、「古いものを大切にする」「伝統を守ろうとする気持ちが強い」等であった。着物や祭りなど伝統的な事物・事象は日本イメージとして一般に定着しているが、本調査におけるこのカテゴリーは、伝統的事物・事象を継承しようとする姿勢やそのような価値観自体を肯定的に捉えているという点で特徴的である。

一方、否定的イメージのカテゴリーの中で、「地震・放射能」は、「津波で大きな被害を受けた」「放射

表4 イメージ別比較

カテゴリー名	数	イメージ別合計
大衆文化の豊かさ	29	肯定 (142)
日本社会・日本人気質への好意的理解	26	
経済・産業の発展	17	
多様性受容	15	
社会的環境整備	13	
日本への親近感	13	
世界からの期待・国際的存在感	11	
伝統の継承重視	11	
食文化の豊かさ	9	
歴史・政治	25	
地震・放射能	23	
人間関係困難	20	
現代社会事情	15	
日本社会・日本人気質への違和感	9	
経済の衰退	8	
地理・自然環境	12	中立 (12)
不詳	8	不詳 (8)
計	264	

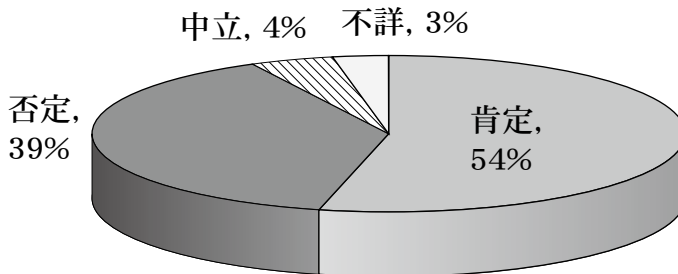


図1 イメージ別比較

能の危険がある国」等、2011年3月11日の東日本大震災後に新たに生じた日本イメージであり、震災後約1年半が経過した時点でもそれらが大きな影響力を持つことを反映したものであると言える。また、「歴史・政治」は、日韓の関係や韓国から見た日本のイメージを語るとき常に現れるイメージであるが、本調査前の時期にちょうど竹島に李明博大統領（当時）が訪れたことや尖閣諸島が国有化されたことなどから領土問題に関する報道が頻繁であったことが反映されたものと考えられる。その内容も、「領土問題」「韓国や中国と仲良くしなければいけない」等の回答が顕著であった。さらに、「経済の衰退」は近年の日本経済の弱体化や将来への憂慮を表すものである。経済・産業の発展に関するイメージはこれまでに行われた調査の中でもたびたび現れるものであったが、本調査において経済の衰退が取り上げられたことは、現在の日本イメージを表わす特徴的なものであると言える。

このように、本研究の対象者に見出された特有なカテゴリーは、否定・肯定を問わず、いずれも本研究

の調査時点の社会状況や日韓関係等を色濃く反映したものであった。

研究課題2：対象者個人のアンビバレントな感情はどのようなものか

以上のような日本に対する肯定的・否定的イメージが見られたが、既述のように、韓国人の日本イメージは肯定的・否定的感情が拮抗したアンビバレントなものであると推測される。そのため、本調査における対象者はどのような二律背反的な感情を抱えているのか明らかにするため、各対象者の20答法の回答およびインタビューデータをもとに、対象者個人における2つの拮抗する感情に焦点を当て分析を行った。この拮抗する感情は、否定的イメージについて語る中でより現れやすいものであったことから、ここでは否定的イメージの中で対象者による言及の多かった「歴史・政治」「地震・放射能」「人間関係困難」と、特筆すべき言及が見られた「経済の衰退」に関わる分析結果について述べる⁽³⁾。

(1) 歴史・政治

まず、否定的カテゴリーの中で最も回答数の多かった「歴史・政治」に言及した対象者に見られるアンビバレントな感情についてである。対象者Nは、20答法の回答として、「日本は私にとって愛憎の対象でもあります」「日本は韓国との関係問題についてこれからもずっともめそうです」と記述した。この「韓国との関係問題」とは、具体的には歴史に関わる日韓の問題を指すとNは述べた。小学生のころから日本に関心を持って接してきたNは、韓国社会における日常生活の中で日韓関係に関わる問題に出くわすたび「もやもや」した感情を抱き、周囲から「責められる」ように感じていたという。

N：小学生の頃から日本の文化を接して好きになってたので、その時から日本の本とか読んだり、ドラマとか見たりしてたんですけど、やはり韓国では歴史教育がすごく、すごくされているので、歴史教育を。日本に対して、敵感、があると思う。
(中略) それのせいかはよくわからないんですが、日本が好きだと言っている人がいたら悪口をしたり、あれは裏切り者だと言ったり。私の中学生の時に、すごくそれが辛かったんで。

Nは、歴史教育が本格化する中学生の時期を特に挙げ、「日本が好き」な自分が周囲の友人から受け入れられないと感じ、「辛かった」と述べている。Nは日本に対して、「悪い点もある、でも私は好き」と捉えており、これらを表す日本イメージとして「愛憎の対象」という表現を用いて自身のアンビバレントな感情を示している。

また、対象者Iは、領土問題で揺れる日韓および日中の関係に触れ、20答法で「日本は過去の歴史をちゃんと認めるべきだと思います」「日本は韓国のことをだいたいぶなめてると思います」などと記述した。だが、このような日本に対する批判の一方で、Iは、「日本はすごい」「意外に外国人が暮らしやすい」「先進国」「街がきれい」など、日本の肯定的なイメージについても多く記述していた。Iは2010年9月から2011年8月までの1年間、交換留学生として大阪で過ごした経験を持つ。留学中、日本人ルームメイトをはじめ親しい日本人の友人ができたと言い、これによって日本の良い部分を含めた多面的な理解が進んだものと考えられる。調査時点でIは日本からの帰国後約1か月であったが、今の自分にとっての日本を「好きだけど、壁がある」「第二の国だと言いたいけど、一生言えない」「むしろ勝ちたい、認めてもらいたい相手」と言い、相反する複数の感情の存在を次のように述べている。

I：たぶん、日本の何かは好きって言えるけど、日本自体は好きって言えない。芸能人とか言語は好きだと言える人は言え

るかもしれないけど、日本自体は好きとは、特に韓国では言えないですね。自分自身が、なんていうか、抵抗があるのもあるし、他の韓国人の前で私は日本のことが好きだとか、言えない、たぶん言いづらいと思います。それで、どうしても日本に勝ちたいとか、私は日本語を勉強して日本を乗り越えるんだと、そういうふうにする人が多いと思います。

Iは、自らの留学体験・交流経験を通して肯定的日本イメージを形成しながらも、一方では日本に対する批判が拭えず、また、韓国国内での見方を考慮すると日本への理解や好意を堂々と主張できないという。このようなことが、Iのアンビバレントな感情を形成している。

以上のように、「歴史・政治」に関する日本イメージを持つ対象者は、日本の文化や人々との接触の中で肯定的な日本イメージを形成しながらも、歴史・政治的背景により韓国社会においてそのことが主張できず、周囲の環境からの受容感が得られないというアンビバレントな感情を抱えていることが明らかとなった。

(2) 地震・放射能

次に、否定的カテゴリの中で2番目に回答数の多かった「地震・放射能」に関するアンビバレントな感情についてである。対象者Fは、20答法の回答の中で「地震・放射能」に関して複数の回答を記述した。それらは、「日本は今、色々辛い時期を送っている」「津波で大きな被害を受けた」「津波の被害より原発事故の問題が深刻」「放射能や放射線の危険がある国になった」等、震災後の日本が抱える事態の深刻さを表すものである。Fは、日本政府が津波や原発の影響に集中する国内外の目を領土問題に向けさせることで注意を拡散させようとしていると、日本政府や報道のあり方を批判した。Fの中では、震災の影響と領土問題は複雑に絡み合っていることがうかがえる。だが、日本という国については、「日本はそれでもまだ魅力を失っていない」「このつらい時期を懸命に克服できる」と述べ、再生への期待を語った。

F：私は一応日本語を専攻しているんで、日本に関心があるし、好感もあるし、そして、まだ日本の力は、私が考えている日本の力は、コンテンツだと思いますけど、そのコンテンツの基本に立っているのは日本語じゃないですか。まだ世界6位、7位の威力を持っている日本語ですから、その日本語を学ぼうとしている人もまだまだいますし、それを見て自分は、日本は十分魅力がある、いろいろ問題発言とか、問題があるんですけど、(後略)

Fは、インタビューの中で「日本は韓国と真の友人になれる」と述べ、それは「日本は韓国にとって憎い国」ではあるが「やっぱりなくてはだめ」「憎いけど友」だからなのだという。日本がこれまでにないほどの喪失感に満ち、社会的・経済的に見ても危機的状況にある現在は「世界が風邪を引いたような状態」であると言う。この「憎いけど友」という両国の関係性の捉え方に、Fの抱えるアンビバレントな感情が見て取れる。

一方、対象者Lも「地震・放射能」に関する回答を複数記述したが、それらは「地震の後、旅行に行くのもう一度考えるようになった」「有名な化粧品会社が多いけど最近では放射能のせいで買うとき迷う」等であった。Lは震災後の自身の動揺を次のように述べている。

L：なんか私は、**（日本の化粧品メーカー）の、あの、シャンプーがすごく好きなんです。で、私はまあ使ってたんですけど、周りから「え？それ、危ないんじゃないの？」って言われたり、なんかネットで探してみても、これどうかな？と思って探してみると、なんかみんなちょっと危ないから私はコレに変えました、っていう、それが多くて。周りからの

意見でちょっとどうかな?ともう一度……。

Lは、小3の時、両親とともに1年間仙台に住み、地元の小学校に通った経験があり、自身にとって日本は近い存在であるという。仙台の小学校ではクラスメートら周囲の日本人から温かい支援を受けたことから、「日本人は親切な人が多い」、また住みたいと感じている。20答法でも、「日本は韓国とお互いの文化的影響を与える国」と述べ、ディズニーよりジブリのアニメで育った幼少時を引き合いに出しつつ、「日本は漫画を通し私の幼い頃、大きい影響を与えた」と述べている。だが、韓国では日本に対する肯定的な評価を耳にする機会は少なく、中学、高校と進むにつれ、歴史教育等を通して両国間の認識の差・温度差を意識するようになったという。震災後、韓国における周囲の反応からLの中での迷いや揺れは以前より顕著となった。Lの親戚は日本に住んでおり年に1度は行き来するが、震災発生当時ちょうど韓国に来ていたその親戚が泣きながら日本に電話をかけていた様子や、自身も仙台の友達の安否を気遣ったことは、韓国国内における周囲の反応とあまりに違っていた。日本との繋がりのない人たちは、事態の深刻さは認識しながらも、どこか他人事のように捉えていたのだという。このように、Lは震災を境に、韓国における日常的な選択の中でも生じる自身のアンビバレントな感情と向き合わざるを得なくなったものと言えよう。

以上のことから、対象者は、震災後、「地震・放射能」に関わる新たな日本イメージが付加されたことで、それが韓国における歴史認識とも絡まり合いながらアンビバレントな感情を改めて抱え、それらに直面していることが示された。

(3) 人間関係困難

さらに、否定的カテゴリーの中で3番目に回答が多かった「人間関係困難」に関するアンビバレントな感情について検討したい。対象者Eは、1年間の日本での語学留学後も何度も日本を訪れ、日本人の友人もおり、日本への親しみも強い。だが、日本人との人間関係構築の困難さも強く感じており、20答法でも「友達になりにくい」「他人に迷惑をかけないように世界一気を遣う国」「他人に本音を素直に言わない」との記述が複数見られた。Eは、知り合って7か月の日本人の友人と韓国人同士のようななかなか親しめないのは日本人の過剰な気遣いによると感じているという。その一方でEは、日本人は「礼儀正しい」「約束をよく守る」「親切」等の肯定的イメージも併せ持っている。

このような人間関係構築上のアンビバレントなイメージは、本調査の他の対象者にも複数言及されている。Eの場合、実際の生活・交流経験の中での困難さを述べているが、実際の接触経験はそれほど多くないケースでも、同様の日本イメージを持つ様子が見られる。例えば、対象者Nは20答法において、「いくら親しくなっても、人との距離感を維持しよう」「日本は裏と表がはっきりしている国」「信じがたいところがある」と回答している。Nは、インタビューで以下のように詳述している。

N: 韓国人は親しくなったら、すごく言葉の遣い(方)が変わってきたりするところがあるんですけど、それに対して、(日本人は)あんまり、親しくなっても敬語を使ったりとかするところで(そう感じる)。この人は私に対して、親しい感じが無いのかな、みたいな。気が気でない、心配になるとか……(後略)。

Nの「心配」は、日本人と親しくなりたいが、「韓国と違うところがある」ため「どうすればよいかわけがわからなくなる」からだという。

実際の接触・交流経験の多少にかかわらず、日本人に対する同様の否定的イメージが形成されていることは、これらが韓国社会における日本人のステレオタイプとも重なることを示すものである。この背景には、日本統治時代からの日本人イメージがあるのだと、Nはいう。

N：韓国人の偏見みたいな感じだと思います。親の世代では、すごくなにか、あの人たち（＝日本人）は何を言っているかわからないから、全部信じないで、みたいなことを言われたりとかして。（中略）たぶん、昔の戦争とかした時から、親から子どもにつながってる言葉だと思うんですけど。

このように韓国における現在の日本イメージには、特に否定的側面において日本統治時代に形成されたものが今なお残る様相が明らかである。

以上のことから、「人間関係の困難さ」のイメージを持つ対象者は、日本人と親しくなりたいと思うものの、人間関係形成上の距離の取り方に関するアンビバレントな感情を抱いていることが明らかとなった。関係困難の要因となる日本人気質は、否定的なものでありながら同時に日本人の美德でもあると認識されており、さらにはそこに歴史的経緯の中で形成されたイメージが関わっていることが、対象者の抱えるアンビバレントな感情を一層複雑なものにしていると言えよう。

(4) 経済の衰退

「経済の衰退」は「地震・放射能」に関わるイメージとともに近年の日本の状況から来る否定的なイメージを表わすものの1つである。そのため、ここで「経済の衰退」に関わるアンビバレントな感情についても検討しておきたい。対象者Jは、経済への関心が強く、20答法の回答でも半数が経済に関わる記述であった。それらの中には、「日本はデフレ進行中」「日本は就職難」という日本経済の長期にわたる不振に関するものも見られた。デフレに関してはニュースで見たり、就職難については直接日本人の友人から就職の厳しさを聞いたりする機会もあったという。だが、一方で「金融」「自動車」「ゲーム」産業の発達や「地方に活気がある」など、日本経済の強固さを示す相反するイメージについても多く言及した。中でも、Jが最も大きな日本イメージであると述べたのは「個人社会化が進行中」ということであった。Jのいう個人社会化とは、具体的には一人でも食べ歩きを楽しめることや、オンラインではない家庭用ゲームが豊富であることなど、個人で楽しめる文化が社会的に発達していることを指す。それはどちらも韓国社会では難しいのだと言う。

Jは、6歳から10年間東京に住み、日本の学校に通った経験を持つ。Jにとって高校の途中まで過ごした日本は「したいことのできる自由な」世界だったというが、韓国に戻ってからはそれが一変したという。

J：（日本での）高校生の時はみんな、恋愛できて、髪染めて、バイトできて自由だなんて思いましたし、大学に来てから就職して、（中略）韓国は大企業じゃないと、周りからものすごく見られる、っていうのがあるんですよ、そういうところしか行けなかったのか、そういうのがほんとにあるんですよ。だからものすごいプレッシャーになるんですよ。でも、日本はモノづくり精神とかあるじゃないですか。だから、その分野に行っても自分の好きな分野に行きたいとか、自分は何をしたいとか、そういうことは自律的にものすごくあると思うんですよ。（中略）社会一般的に見て、韓国よりは自由なんじゃないかなと思います。

Jは、今の自分が感じる「日本のイメージ」はこの「自由」に集約されるという。Jにとっての日本は、「し

たいことができるところ」であり、それは韓国では絶対無理なことであるという。

J: ほんとにそれ、「命」(＝それ一筋)の人しかできないんです。日本では高2まで甲子園目指すぞ、ってなって、高3の時勉強していい大学行くとか、あるじゃないですか。韓国じゃ無理なんですよ。そんなことじゃいけないんですよ。ほんとに野球してるやつは野球だけ。(中略) 大学入っても、最近では1年生もあんまり遊べないんですよ。単位のせいで、就職考えないといけないですし、軍隊、軍隊はまあよかったですけど、大学でも勉強とかしかできないし、バイトもできないし、いろんな旅行とかもできないし、仕事をするとしても自分がしたい仕事じゃなくて、自分の専門関連で自分の自己開発のための仕事ですね(傍点部分強調)。そんな感じになって、これがほんとに、どういうんですかね、厳しいというか、自分がないというか。ですから、もし、ぼくが子ども育てる年になったら、自分の子どもにはしたいことをして、いろんなコンテンツがあって、自分のしたいこと見つけて、いろんな経験して、そういうところで育てほしい。

韓国への帰国以降、アルバイトも旅行もできない受験生としての生活と、それに引き続き勉学に追われる大学生活を送る中で、Jは選択の「自由」があるかどうかを韓国社会と日本社会の大きな違いとしてとらえるようになったものと考えられる。だが、社会生活の中である種の選択肢のなさ、不自由さを感じていると思われるものの、日・英・中・韓の4か国語を習得したJが、将来日本で就職することはないという。

J: 親が反対しますね。親が。親が日本が嫌ってわけじゃないんです。でも、そういうのが強いんです、「おまえ、韓国人だろ」。今の親の世代は、あれじゃないですか、北朝鮮より貧しかった世代じゃないですか。ものすごい、たぶん今の僕たちの世代なんかより頑張ったんですよ。で、今、成長させてきたんですよ。で、俺らの努力をなんだと思ってる、ってなるんですよ。ですから僕が勉強して4か国語をペラペラにできたとしても、その能力があるのは韓国の発展のためだ、韓国を発展させて、もっと自分の子孫たちにもっといい環境を作ってあげること、それを考えないのか、って、なるんですよ。(後略)

Jにとっては「ゲームや食事を一人で楽しむ」ことが選択肢の1つにあり気兼ねなくそれが選べること、また、将来、どこで何をやるかが自由に決められることこそが「自由」なのであり、それこそが「先進国」であるのだと述べる。

J: 僕が先進国だと思う基準は、ある程度自由に生きられるってことだと思うんですよ。自分がしたいことをして生きられること。韓国はそれは、生きられないじゃないですか。日本みたいに大学行って、おれは服を作りたい、いきなりやめて服を作ったり、でもそれで日本は金を稼げるじゃないですか、ある程度。韓国では絶対無理なんですよ。

このように、Jは、身近な情報源から得た情報に基づく日本経済の衰退に関わる影響について言及しながらも、一方で韓国社会との比較から、日本社会における自由さを肯定的に評価し、それが経済の安定に裏付けられた社会基盤のゆるぎなさによるものであると捉えている。Jに見られる日本に対するアンビバレントな感情は、日本の経済的な観点を軸にしつつも、実は日本と韓国の両社会の比較から生じた韓国社会への厳しいまなざしや生きにくさを示すものであると言えよう。

以上、対象者の中に見られる否定的イメージ・肯定的イメージの拮抗するアンビバレントな言及について、「歴史・政治」「地震・放射能」「人間関係困難」「経済の衰退」に焦点を当てて検討した。本研究の対象者の事例から明らかとなったアンビバレントな感情とは、幼少の頃からの日本人や、日本文化との接

触・留学機会等により、日本に対する親近感や肯定的なイメージを併せ持ちながらも、それを率直に表出できない韓国社会の感情的な複雑さを表わすものであると言えよう。そこには、韓国社会における歴史認識が大きく関与していることは明らかである。

考 察

本研究では、韓国の20代の日本語上級話者を対象に日本イメージがどのようなものか（研究課題1）、アンビバレントな感情はどのようなものか（研究課題2）について、インタビューをもとに質的分析を行い検討した。その結果、研究課題1のカテゴリー分類においては、本対象者である韓国人日本語上級話者は肯定的イメージが過半数を占め、否定的イメージが4割程度、中立的イメージが1割未満という結果となった。研究課題2では、対象者の語りからはアンビバレントな様相が詳述されていた。以下に考察を行いたい。

まず研究課題1に関して述べると、第一に、肯定的イメージが多数を占めた理由については、本対象者の多くが日本への留学経験、旅行等の日本滞在経験を持っており、その生活体験を通して日本の諸相をよく理解していること、また、複数の日本人の友人との関わりをもち、日本の情報を常に自ら収集している状況にあったことが考えられる。これは、日本人との接触経験、滞日経験、日本のマスメディア接触、日本語学習経験、日本語能力の高さが対人関係に関するイメージ形成に寄与し、否定的な日本イメージとは負の関係にあるという先行研究の結果と一致している（呉，2010）ことを示す。また、加賀美・朴・守谷・岩井（2008）の調査も、海外滞在経験や異文化体験、日常的な日本社会との接触による知識を持つ人、現実的に日本を熟知している資源がある人は親和性が高いという結果であったが、それと類似した傾向を見せている。

また、肯定的カテゴリーの中でも「大衆文化の豊かさ」が最も多かったが、日本のゲームやアニメなどの大衆文化が韓国の子どもや若者たちに日常的に親しまれている状況であることに加え、調査対象が日本語上級話者であり、自らメディアに接触することが容易であるため、その傾向がより強かったと思われる。加賀美・朴・守谷・岩井（2010）では日本との積極的接触を持ち日本文化に関心を持つ人は親和性イメージが高いという結果であり、本調査結果はそれを支持しているといえる。

第二に、否定的カテゴリーに関して「歴史・政治」、次いで「地震・放射能」が多数を占めたことについては、いずれもメディアを通して頻繁に見聞きできる情報によるものと考えられる。「歴史・政治」については、2012年9月は尖閣諸島や竹島をめぐる中国・韓国と日本との外交関連報道が多くなされ、領土問題に端を発する歴史・政治問題への関心が高まっていた時期で、この影響が大きいと言えよう。また、歴史教科書を介した中高の学校教育（岩井・朴ほか，2008；金，2009）や韓国のマスメディアの情報、インターネットの日本動画などが侵略者としての日本イメージ形成に影響を与えるという研究結果もあり（呉，2010）、本研究の対象者もまたこの影響を受けていると考えられる。一般的に韓国社会では領土問題や歴史問題への関心が高く、それに加えて昨年（2012年）の状況が拍車をかけたと推測される。また、「地震・放射能」の影響については、地震直後から継続的に韓国国内のメディアを介して頻繁に映像が流されたことで、日本製品に対する放射能汚染の不安が高まったと言える。

第三に、肯定的イメージ・否定的イメージの双方に、人間関係に注目した言及が多く見られたことである。例えば、「日本社会・日本人気質への好意的理解」「日本への親近感」「人間関係困難」「日本社会・日本人気質への違和感」のような相反するカテゴリーの出現である。それについては本対象者が日本での生

活体験を持つ者が多かったことから、日本人との人間関係において肯定的側面も多く見聞きし理解を示している一方で、実際の間人関係を通して違和感を抱いた体験など、理解しがたさや関係構築の難しさを痛感しているものと考えられる。これも日本人との接触経験があり日本語能力が高い人は対人関係に関するイメージを持ちやすいとの先行研究の結果と一致している（呉，2010）。

第四に、本対象者に特有のものとして見出されたカテゴリーは「多様性受容」「伝統の継承重視」「世界からの期待・国際的存在感」「経済の衰退」である。これらは対象者が韓国社会と比較して日本社会の魅力を感じたものである。例えば、彼らの語りによれば、韓国社会と比べると日本社会は電車に乗っていても誰ひとり同じ服装をしておらず、個性が生かされ独自性が容認されているという。また、伝統の継承重視についても、何百年も続いているお菓子屋さんや伝統工芸品店が承認され、どの地域にも祭りがあるなど伝統継承を社会全体で尊重しているという言及もあった。このことは、学歴重視社会の韓国と比べて、日本は学歴だけでキャリアが決まるのではなく、技術の継承によって多様なキャリアが容認されるという価値観の多様性をもつことを長所として評価しているものである。さらに、世界からの期待感については、日本はノーベル賞の受賞者を輩出しており世界の中でも学術的に突出していることを承認したうえで、東日本大震災や原発事故の被害や長期的な経済低迷など、近年の否定的な情勢にあっても、それを克服できる底力を持っているという評価につながっている。

研究課題2である対象者個人のアンビバレントな感情については、これまで多くの先行研究からも指摘されてきたが（鄭，1998など）、上述したとおり、対象者の語りからは「日本は愛憎の対象」であることが述べられている。対象者は韓国社会における日本への好意の表出はタブーであり、また好意を示すことの後ろめたさと葛藤を述べている。特に子どもころからジブリアニメなどを通し成長し影響され日本に憧れてきたものの、中学・高校における歴史教育によって両国間の認識の差・温度差を意識するようになったことが指摘されている。これは岩井・朴ほか（2008）の韓国の国史教科書の分析でも歴史教育において近代史が重視され、侵略者、文化後進国としての日本が示されているように、大衆文化による肯定的イメージに、歴史教育による否定的イメージが付加され、対象者の内面に両者が混在している様相を示しているものと言えよう。

以上のとおり、本対象者の語った日本イメージの内容は、日本人や日本文化との積極的な接触体験を持つ対象者であったため、従来見られたステレオタイプのイメージではない、日本社会・日本人の内面に踏み込んだ多様な側面が現れており、その語りからは東日本大震災や経済の低迷など近年の日本に関する社会情勢を反映したものが出現したと思われる。また、韓国の若者のアンビバレントな感情は、概して大衆文化の受容と歴史・政治が影響要因として大きいことも改めて認められた。

今後の課題は、当該地域の対象者がどのような社会環境的事象の影響を受けてきたか、関連要因を付加して量的調査を行う必要がある。また、日本に居住するアジア諸国の留学生の日本イメージについても広く比較検討していくとともに、相互理解を促進するような多様な教育プログラム開発が必要とされる。

【注】

- (1) 9分割統合絵画法とは人や事物に対して抱いているイメージを描かせ、それを多面的に測定する心理検査の方法である。加賀美・守谷ほか（2008）は、対象者に対し、9つの四角に1～9の番号が振られた画用紙に、1から順に思いつくままに日本のイメージに関する描画（描けない場合、記号や文字、図形でもよい）をカラーペンで描けるところまで描くよう依頼し、各番号の横に何を描いたか言葉で書くように説明したとして

いる。対象者に子どもが含まれており、調査者とは文化的背景も異なることから、非言語によるこの手法を採用したという。

- (2) KJ法とは、自由記述やインタビュー等から得た多くのデータを既成概念にとらわれることなく分類し、検討するのに有効な方法である(川喜田, 1967)。分析手順としては、抽出されたデータを言及された内容の本質に基づいて単位化して「見出し」をつけ、それらの内容の類似性・関連性により相互の親近性を見出し、グループ化したうえで「表札」をつける。
- (3) 本稿における対象者の言及は、インタビューデータのまま引用したものである。特に必要がある場合に限り括弧内に情報を付加した。

【参考文献】

- 玄大松 (2005) 「韓国人の血・地・知、そして日本-韓国人のアイデンティティ・独島意識・日本イメージに関する実証分析」『東洋文化研究所紀要』148, 東京大学東洋文化研究所, pp75-141.
- 岩井朝乃・朴志仙・加賀美常美代・守谷智美 (2008) 「韓国「国史」教科書日本像と韓国人学生の日本イメージ」『言語文化と日本語教育』第35号, お茶の水女子大学日本言語文化学会, pp10-19.
- 岩男寿美子・萩原滋 (1982) 「韓国人大学生の対日イメージ」『慶應義塾大学新聞研究所年報』18, 慶應義塾大学, pp23-35.
- 鄭大均 (1998) 『日本(イルボン)のイメージ-韓国人の日本観』中央公論社.
- 加賀美常美代 (2013) 『アジア諸国の子ども・若者たちは日本をどのようにみているか-韓国と台湾における歴史・文化・生活における日本のイメージ』明石書店.
- 加賀美常美代・守谷智美・岩井朝乃・朴志仙・沈貞美 (2008) 「韓国における小・中・高・大学生の日本イメージの形成過程-9分割統合絵画法による分析から」『異文化間教育』第28号, 異文化間教育学会, pp60-73.
- 加賀美常美代・朴志仙・守谷智美・岩井朝乃 (2008) 「韓国の小・中・高・大学生の日本イメージと関連する要因-日本語学習と異文化接触に焦点を当てて-」『日本語教育学会国際研究大会予稿集』1, pp182-185.
- 加賀美常美代・朴志仙・守谷智美・岩井朝乃 (2010) 「韓国における小学生・中学生・高校生・大学生の日本イメージの形成過程-日本への関心度と知識との関連から」『言語文化と日本語教育』第39号, お茶の水女子大学日本言語文化学会, pp41-49.
- 金恩淑 (2009) 「韓国人の日本認識と歴史教育」『探究』第20号, 愛知教育大学社会科教育学会, pp6-13.
- Kuhn, M. H. and McPartland, T.S. (1954) An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, 19(1), 68-76.
- 森谷寛之 (1989) 「九分割統合絵画法と家族画」『臨床描画研究』4号, pp163-181.
- 呉正培 (2008) 「日本語学習者の日本人イメージに見られる特徴とその形成要因-韓国の大学における学習者と非学習者の比較」『世界の日本語教育』18, pp35-55.
- 呉正培 (2010) 「韓国人大学生の日本イメージの形成メカニズム-イメージ形成の因果モデルの提案-」『日本学報』第83号, 韓国日本学会, pp86-97.
- 櫻坂英子・内藤伊都子・泉千春・奥山洋子 (2008) 「韓国の日本語教育状況の変化と大学生の日本語学習動機-日本語学習動機と日本・日本人イメージの検討」『日本学報』第75号, pp299-309.
- 櫻坂英子・奥山洋子 (2003) 「韓国人大学生の対日観と日本語学習動機形成要因の検討」『日本学報』第54号, 韓国日本学会, pp187-198.

【付記】本研究は平成24年~26年度科学研究費補助金(基盤研究(C)研究代表者:加賀美常美代)「東日本大震災後のアジア諸国の日本イメージ形成過程と関連要因」による成果報告の一部であり、2013年6月に異文化間教育学会ケースパネルで共同発表を行ったものの一部を取り上げて論文化したものである。また、本調査に協力して下さった関係者の皆様には心より感謝し、御礼を申し上げたい。